

2014年6月26日～28日

第110回日本精神神経学会（横浜）

歩行発症障害後約25年間経過し、中等度の認知機能低下が見られた正常圧水頭症の一例

稲山 靖弘

歩行発症障害後約25年間経過し、中等度の認知機能低下が見られた正常圧水頭症の一例

【はじめに】正常圧水頭症は、治療可能な認知症として注目され、歩行障害、尿失禁、認知症を呈するとされている。しかしながら、自然経過は詳細に報告されていない。今回我々は、歩行障害で発症し、シャント術をうけずに約25年経過したと思われる症例を経験したので若干の考察を加え報告する。【症例】80才台男性【初診時主訴】物忘れ、歩行障害【既往歴】アルコール依存症、前立腺肥大、腎結石【家族歴】不詳【生活歴】不詳【現病歴】X-38年、アルコール依存症にて精神科病院に入院し、その後もアルコール性肝障害にて入退院を繰り返した。X-25年、正常圧水頭症による歩行障害を指摘され、リハビリテーション病院に入院した。しかし治療意欲乏しく、X-19年特別擁護老人ホームに入所した。入所当時は、失禁はなく、伝え歩きが可能で、明らかな認知機能の低下を認めなかった。X年、認知機能の低下のため当院受診した。【初診時所見】意識は清明、精神運動的に静穏である。笑顔を見せながら、「ホームの生活はなんの不自由もない」、「趣味は、映画鑑賞で、水戸黄門が好きだ」という。【検査】HDS-R：12点、立体模写：不可、握力：左13kg、右15kg、指鼻テスト：可能、固縮：なし、歩行：立位は不可であるが、下肢の進展、屈曲可能、感覚障害：なし、頭部MRI：著明な脳室拡大、高位円蓋部脳溝は狭小、脳SPECT：脳梁周囲、前頭葉の血流低下、頸椎MRI：頸部、腰部に脊柱管狭窄あり【治療経過】現在、気管支拡張薬、排尿改善薬、鉄剤を服用しているが、抗認知症薬、抗精神病薬は服用していない。シャント術の適用を含めた脳外科受診を拒否している。【考察】正常圧水頭症は、歩行障害、失禁、認知機能の低下が緩徐に進行する疾患である。シャント術後の予後は詳細に報告されているが、自然経過については報告がすくない。今回我々は、歩行障害発症後、約25年経過した正常圧水頭症の一例を経験したので報告した。